

第24回ふれあい医療作文コンクール（山梨日日新聞社、山梨放送、県医師会主催）の入賞作が決まった。入院体験を通して、健康のありがたさと周囲の支えへの感謝をつづった、県医師会会長賞の土橋幸十美さん（羽黒小）をはじめ、山梨日日新聞社賞の川口碧さん（山梨英和高）、山梨放送賞の瀧口桂子さん（甲府市）、優秀賞の興石晃大さん（駿台甲府中）の上位4編を紹介する。このほか優秀賞に池田めぐみさん（甲府市）、佳作に笠井涼加さん（山梨英和高）、鶴田里佳さん（甲斐市）、田中萌さん（甲府南高）、亀山ひかるさん（駿台甲府中）、孕石おとはさん（山梨学院小）、黒沢奈々恵さん（山梨大付属中）、長田麻奈美さん（甲府城西高）が選ばれた。表彰式は4日午後3時から、甲府・県立図書館多目的ホールで行う。

「碧さんってどうしてそんなに元気なの？」「いつも楽しそうでうらやましい」

私は周りの人からよくこう言われる。褒められたいのか、能天気だと思われるのか、元気なわけがわからないのかはよくわからないが、確かに私は健康そのものだ。学校もほとんど休まないし、部活動も毎日頑張っている。でも、幼い頃の私は、今の元気な姿からは想像も出来ない難しい病と闘っていた。当時三歳、幼すぎて記憶がほとんどないため、母の日記を参考にしながら書き進めていきたいと思う。

は生まれつき気管が細い病気で、医学が進歩した現在でも治すことが難しい病気の一つに挙げられている。

十六年前、三人姉妹の長女として生まれた私は、風邪をひくと咳や痰が止まらず、喘息と診断された。また、十代だった両親にあって、初めての子育ては苦労の連続だった。そして三歳の時、大変な事態が起こった。肺炎のために入院していた私は、ベッドの上で突然意識を失ってしまったのだ。さらに大きな病院へ救急搬送され、精密検査が行われた。その時、初めて本当の病名が分かった。

五匹、シャープの芯三本分と同じくらいの細さだった。全く生きていないのが不

思議なくらいの状態であった。治す方法は手術しかないと言われたが、症例が少ないため手術をしてくる病院は簡単には見つからなかった。小児外科の権威と呼ばれている先生方にも手術は不可能と断られ、入院を繰り返す生活が長く続いた。

想像以上に厳しい宣告だった。衝撃を受けた両親は、一最悪の場合が脳裏に浮かび、すくには手術に踏み

切らず、思い悩む日が続いた。しかし、先生は両親の気持ちをしつくりと聞き、こう言ってくれた。「辛い決断を助けるために手術しかりませぬ。私たちが全力を尽くします。一緒に頑張りましょう。」先生の言葉は率直で、真心にあふれていた。どの病院でも治療は不可能と言われ、悩んでいた両親は、私の言葉にこそ救われたという。優しくも優しい先生の言葉が、両親に勇気を与えてくれた。

味が考えながら、「明日」が来るのを当たり前と思わず、感謝して日々を過ごして

手術から一ヶ月、ようやく退院の日が決まった。その喜びを母は日記に綴っている。「娘たちが大きくなった。私たちが大きくなった。おじいちゃんや買ってくれた二段ベッド。あの可愛いベッドで碧が眠る日は来ないのかも知れない。そう思う度に胸が締め付けられる。でも、また甲府の家でみんな一緒に暮らせるんだね。」改めて考えると、両親は導かれるように、先生のいる病院へ行ったように思う。今、私が元気に過ごせるのは、T先生と出会えたから。両親を励まし、最善を尽くして下さった先生には、どんなに感謝しても足りない。今回、母に日記を見せてもらい、両親がいかに私を愛してくれたのかを実感した。両親をかけてくれた妹の世話をしてくれてくれた祖父母にも、深い感謝の気持ちがわいてくる。私は一人で大きくなったのではない。私の小さな命を守るために、様々な人たちが全力を尽くしてくれていたことがあったことを忘れてはならない。改めて強くそう感じる。

山梨日日新聞社賞

川口 碧

(山梨英和高2年)



母の日記から